



平塚ロータリークラブ 週報

Hiratsuka R.C. Weekly



ロータリーは
機会の扉を開く

1. 真実かどうか 2. みんなに公平か 3. 好意と友情を深めるか 4. みんなのためになるかどうか

会長：鳥山 優子 副会長：清水 雅広 幹事：江藤 博一 クラブ会報委員長：葛西 敬

例会日 毎週木曜日 12:15～13:30

会場 グランドホテル神奈中 2F

事務局 平塚市松風町 2-10 平塚商工会議所内

連絡先 0463-23-5955 (事務局)

2020年 9月17日 第 3276 回 週報第 3276 号

本日 9月17日	会員数 64名	対象者 62名	出席者 44(44)名	出席率 70.97%			
前々回 9月 3日	会員数 64名	対象者 62名	出席者 44(44)名	出席率 70.97%	MUP 2名	計 46名	修正率 74.19%

本日の卓話者ご紹介

東海大学教養学部国際学科
教授 貴家勝宏様



卓話

「パンデミック後の世界 — 米中対立と東アジア情勢 —」

東海大学教養学部国際学科
教授 貴家勝宏

世界を襲った新型コロナウイルスの猛威は、未だに収まらない。歴史上、人類は繰り返し新たな感染症に襲われ、その都度人的被害を出しながらも、克服してきた。感染拡大が長期化する中、移動制限による大幅な経済活動の停滞、失業や格差の拡大、民主主義の動揺、大国間の対立等、国家や社会への影響が至る所で表面化した。今まで繁栄の礎となってきた平和的な国際環境、市場経済、自由貿易体制、サプライチェーン等、グローバル経済は深刻なダメージを受けた。パンデミック後の世界はどうなるのか、アジアの国際秩序の変容という視点で考えてみたい。

新型コロナウイルスの感染拡大が長期化すると、経済的打撃は避けられない。特に新興国においては、経済不安が社会不安に転嫁し、政治的不安定化につながる危険性がある。ウイルスの発生源である中国は、いち早く感染症の拡大を抑え込むことに成功した。その後、巨大な生産力を背景に「マスク・ワクチン外交」といわれるよ

うな「医療支援」を行い、主に途上国への支援活動を通して、グローバルリーダーとしての中国像を描こうとした。その一方で、国内では監視網の強化、対外的には勢力拡大と、パンデミックを利用して自国の利益追求に走る中国には世界中から批判が集まった。アメリカとは貿易・通商摩擦からITをめぐる技術覇権競争、経済のデカップリング、金融、さらには安全保障面・政治体制をめぐる対立へと拡大し、国際秩序の不確実性は確実に高まった。

歴史的・構造的視点で見れば、アジアはかつて世界の経済的中心地であった。中国やインドの経済発展は、再びアジアに世界経済の重心が戻りつつあることを示している。一方で、パックスブリタニカからパックスアメリカのように覇権国が移行する時期には、国際秩序が乱れ、二度の世界大戦が起きたことは極めて重要な20世紀の教訓である。共産党の指導する中国は、何を狙っているのか。東シナ海、南シナ海、香港での民主化制度の抑圧等、他国の安全と繁栄を脅かし、戦浪外交・対外拡張主義で他国を威圧する外交姿勢では、アメリカとその同盟国が中国に対抗し連携する動きを促すだけである。

日本の役割は、法の支配、平和と自由で開かれた国際協調体制の維持といった価値観を基に国際社会を擁護していくことである。一党独裁体制に固執し、愛国主義で領土拡大を推し進める大国主義の中国は、日本にとって政治・経済・軍事上の脅威である。中国の対外強硬策が活発化する状況においては、リスクヘッジとしての日米同盟の強化、インド太平洋戦略、クアッド（日米豪印）による安全保障面の連携強化は不可欠である。一方で、経済連携協定をアジア太平洋地域に多層的に構築することが、中国と共生する上で経済・安全保障上の要である。中国は社会主義体制を維持しつつも、「改革・開放」政策により、自由貿易体制の恩恵を最大限に享受してきた。資本主義的要素を取り入れ、外資を積極的に導入し、世界のサプライチェーンの中心地として経済発展を遂げてきた。つまり、アメリカ主導のグローバルな協調体制に中国は順応することで発展したのである。

近年の中国の一方的な利益拡大の行動が、中国への不信を高めていることは明らかである。一方で、グローバル経済の再興には、通商、先端技術、データ、法治等、ビジネス上の多国間でのルール・管理体制の構築が急務である。新型コロナウイルスとの戦いはやがて収束するが、アジアにおける地政学・経済的競争は中・長期戦で取り組

む必要がある。法の支配に基づくアジアの国際協調体制の構築に向けて、中国に「改革・開放」路線への回帰を促すことが第一歩である。日本の新政権に課せられた対中課題は極めて大きい。

卓話者ご紹介

貴家勝宏（さすが かつひろ）様

東海大学教養学部国際学科教授

1963 年生まれ、早稲田大学政治経済学部卒、ケント大学修士、ウォーリック大学博士（国際政治学）専門は、国際政治経済学、アジア政治経済、経済統合。

日本国際政治学会、アジア政経学会に所属。著書に『Microregionalism and Governance in East Asia』（Routledge）[単著]、『日米中トライアングル—3 カ国 協調への道』（岩波書店）[共著]、『現代中国外交の六十年—変化と持続』（慶応義塾大学出版会）[共著]、『Modern Economic Development in Japan and China』（Palgrave Macmillan）[共著] 他論文多数。

会長報告

先週、この席で報道相が大事だという話をしました。メールで感想を寄せてくださる方がいるなど、思った以上の反響があり大変嬉しく思っております。それと同時に、人とのコミュニケーションや人間関係の構築といったことには、いくつになっても、どんな立場になっても、生きていく上で重要な課題だと感じました。

さて、人間関係における課題と言えば、社会ではダイバーシティという言葉が叫ばれて久しいですよね。ダイバーシティとは、人種や性別、性的マイノリティはもちろん、経歴や働き方、ライフスタイルや価値観といった様々な違いを意味する言葉です。

なお、欧米を始め、最近ではダイバーシティ&インクルージョンという言葉で表現されることの方が多いようです。ダイバーシティは多様性、インクルージョンは受容性という意味です。この言葉からもわかるように、単に様々な違いを知るだけでなく、その違いを互いに理解し、認め合いながら人間関係を構築することが大事だということがわかります。

では、多様性を受容する、つまり様々な違いを理解し、認め合える人間関係を構築するにはどうすればいいのか。そのためには、相手の考えを尊重した上で、互いに意思疎通を図ることが最も大切だと私は考えています。

仕事でもプライベートでも、ちょっとしたボタンのかけ違えてありますよね。言葉が足りなかった。もっとしっかり聞いておけばよかった。そんな経験は皆さんもあるのではないのでしょうか。私も先日、取引先の銀行口座を聞いたときに、普通か当座かを聞かず、「まあ会社なので当座だろう」と思い込んで、振込んだらエラーになってしまったという失敗がありました。

これくらいは笑い話で済まされますが、ちょっとしたボタンのかけ違いが、相手に不信を抱いたり、抱かせたり、

時には差別的になったりするなど、人間関係のエラーを引き起こしてしまうことだってあるわけです。

私たちは同じ日本人で同じロータリーに属しています。一見するとダイバーシティなんて関係ないんじゃないかと思ってしまうがちです。しかし、ここにいる皆でさえ、一人一人立場も年齢も性別も考え方も違う。だからこそ、私たちは相手の気持ちを思いやり、互いに尊重し、誤解が無いよう意思疎通を図っていく必要があるのではないのでしょうか。

ダイバーシティ&インクルージョンは決して特別なことではありません。私たちも、このロータリーから始めましょう。お互いの、皆さんの多様性を受容するために。

幹事報告

◎9月19日（土）12:30より20-21年度地区ロータリー財団セミナーが開催されます。
鳥山会長が出席されます。

委員会報告

今週の委員会報告はありません。



貴家教授のご紹介をされる守屋会員

メイクアップ (MUP) 1名

常盤卓副会員

本日のスマイル 8名

ゲスト 1名

東海大学教養学部国際学科 教授 貴家勝宏様

ビジター 0名

卓話・行事予定

9月24日(木) 入会記念卓話 浅野 康会員
10月01日(木) 未定
10月01日(木) 湘南いなほクリニック 院長 内門大丈様

市内例会変更

平塚西ロータリークラブ

9月23日(水) 休会 ⇒ 財団セミナー報告
9月30日(水) 移動例会 ⇒ 休会

